岩津ねぎの生育不良や病害が回避できる平床・遅植え栽培法

岩津ねぎを5月に播種し、地床苗を8月下旬に平床定植用穴あけ器で植え穴をあけ定植する栽培法は、苗床でのさび病発生期や夏季の高温期定植を回避でき、根の発育環境も改善できる。これにより、ねぎの病害発生や高温障害による生育不良も軽減され、定植後の生育が旺盛となり、また、消費者に評価の高いL級サイズの高品質ねぎの生産が可能となる。

内　容

岩津ねぎの播種・定植日を５月８日・８月28日とし、定植時の苗の大きさを中苗（太さ1.0～1.5cm）、大苗（1.5～2.0cm）に区分し、慣行の播種-定植日を４月22日-７月30日、中苗定植とした。

平床植えは、ほ場耕運（こうう）後平床定植用穴あけ器（写真）により植え穴をあけ、ねぎ苗を深さ10cmに差し込み定植した。慣行の溝底植えは、深さ約20cmの植え溝を掘り定植した。定植に要した労働時間は、平床植えで10a当たり18時間、慣行の溝底植えは植え溝掘りと定植の合計が19時間であった。

作製した平床定植用穴あけ器は、木製で植え穴あけピンの直径２cm、長さ11cmで先端を円錐型にし、穴の間隔４cmで一度に24カ所の植え穴をあけられる。材料はホームセンターで購入可能で、材料費は約5,500円であった。

本栽培法は、さび病の影響のない５月播種、高温期を過ぎた８月末定植であることから、病害発生や高温障害による生育不良もなく生育は順調であった。

収穫したねぎの調製重※は、中苗の場合平床植えが192.5gと溝底植えの151.6gに優り、草丈70cm以上、葉鞘（ようしょう）（軟白部）長25cm以上、葉数は3.5枚となり、消費者に最も評価が高い出荷規格Ｌ級を満たした。（図）。

葉鞘の曲がり程度は、平床植えが無～微、慣行溝底植えが少～中となり、平床植えで根の曲がりはほとんどなかった。また、葉鞘径、葉身径及び分けつ率は、いずれの播種期とも差は少なかった。

収穫時の根量は、中苗平床植えの21.0 g/本に対し、溝底植えは8.1g/本となり、平床植えは通気性、排水性が改善されたことから根量が多く、地上部の生育が旺盛になったと考えられる。

普及上の注意事項

平床植えの留意点としては、排水の良いほ場を選定するとともに、ほ場の均平による水たまりの発生予防や周辺に明渠（きょ）等の設置を行うことが大切である。

また、耕土が浅いほ場は、培土量確保のため畝（うね）幅を慣行溝底植えよりやや広くする。

福嶋　昭（農産園芸部）
（前北部農技　農業・加工流通部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－2424）

※枯れ葉や根を除き出荷形態にしたねぎの重量

作製した平床定植用穴あけ器

平床植えが収穫重、調製重に及ぼす影響